

## 戦友 島田 真路

1983年、留学先の米国立衛生研究所（NIH）で夜遅く、放射線を照射する装置の前で何度も見かける日本人がいた。世界で初めて抗エイズウイルス（HIV）薬を開発した現国立国際医療研究センター研究所長の満屋裕明さんだ。

当時、エイズは不治の病。自ら感染するリスクも伴うが、「どうしても治したい」と果敢に研究に挑んだ人だ。それでも懸念する声があり「研究は夜中だけにしていた」と話していた。満屋さんは感染症、私は皮膚科で分野は違うが、なぜか馬が合った。若手研究者が抑えつけられる時代に「何かやってやろう」という強い思いが似ていたのかもしれない。

互いに日本の研究開発の将来を見据え、何が必要かを考えてきた。大学の研究費が削られる現状を憂い、大学の教授を選考する際はまずは実績重視、批判覚悟で同窓の誼みなど忖度はしない。だから2つ年上の先輩に対して失礼かもしれないが、「戦友」と思っている。

現在、新型コロナウイルスの感染が国内外で広がっている。ようやくウイルスの培養が始まり、満屋さんも今、様々な抗ウイルス薬が効くかどうか試しているという。「特定のウイルスを狙った薬は万能ではない。一つ一つ試してみるしかない」。そんな話を最近はしている。（しまだ・しんじー山梨大学学長）